小松市テニス協会 50 周年記念座談会

参加者　森金太郎・河原正美・沢野唯志・須田美子

Ⅰ　創成期の歴史

（沢野）小松市テニス協会５０周年座談会を始めたいと思います。まず、創成期の歴史を振り返りたいと思います。創立２０周年記念誌には大田英夫初代会長が文章を寄せられ、協会設立に向けた経過が明らかになっています。それでは、森さんから発足当時のエピソードをお願いします。

（森）当時は軟式テニスが全盛で、軟式テニスの日程を優先してスケジュールを決めるという状況が続きました。協会発足に大きな力となったのは荒幡さんの存在です。金沢から小松に来られて、金沢対小松の対抗戦などを企画し、協会発足へと尽力されました。

（沢野）1967 年に協会は３０名で発足しましたが、それ以前にはどのような動きがあったのでしょうか。

（森）小松製作所・航空自衛隊・帝人・市民病院に硬式テニス愛好者が何人かおられ、たまたま私が勤務していた帝人に一面テニスコートがあったので５時ごろから練習をするようになりました。そこで、協会設立に向けた話が出てきたというわけです。試合に出ていた人がおよそ３０名程度、手書きの組み合わせ表でしたが、これが発足時の状況です。

II　「白球呼友」「吉田宗弘氏の言葉」

（沢野）協会発足のキーパーソンは、大田氏・荒幡氏・森氏、そして航空自衛隊のパイロット山田氏ということになります。さて、小松市テニス協会には「白球呼友」という言葉があり、さらに吉田宗弘氏の言葉を長年にわたり大切にしてきている伝統があります。この二つの言葉についてお話を伺います。

（森）２０周年を迎え、記念誌を発刊することになりました。その際、太田先生に何か言葉を頂けないかとお願いしたものです。当時は「白球」だったわけですが、テニスを通じて友情の輪が広がるという素晴らしい言葉です。また、吉田宗弘氏の言葉は私がふと目にしたのですが、これこそがテニスの精神であると感銘した言葉です。小松市テニス協会の精神ともいうべきものです。

（河原）２０周年記念誌を編集した時、大田先生直筆の「白球呼友」を頂きました。「だいぶ練習したぞ。」と笑っておられました。いまでも、私の自宅に大事に保管してあります。

(須田)小松市テニス協会として、これからも大切にしていかなければならない言葉であると思います。

III　テニスコートの歴史

（沢野）それでは、小松市におけるテニスコートの歴史と変遷について話を移していきます。芦城公園の現在の図書館のあたりにテニスコートがあったという記録が残っています。

（河原）高校２年の時、雨の中で小松高校と金沢高校が団体戦を戦いました。二面あった

と記憶しています。軟式・硬式テニス愛好家が共存して使っていたのだと思います。その後、末広コートが整備されて活動の拠点となりましたが、テニスといえば軟式テニスが中心という時代でした。

（沢野）協会設立から５年後、末広にアンツーカーコートが一面誕生します。その経過を話してください。

（森）硬式テニスのコートが無いということで、大田氏や荒幡氏が中心となって専用コートを作っていただきました。オープニングには朝日生命の細野・高柳選手に来ていただき、模範試合を行い、全日空の協力も得て大いに盛り上がりました。荒幡さんの尽力のお陰であると思っています。

（河原）このアンツーカーコートも使って試合をしました。靴下が真っ赤になってゲームしたのも良い思い出になっています。

（沢野）そして次に木場潟にハードコート３面が整備され、公式専用コートが完成するわけです。

（森）このコートも荒幡さんが関わっておられます。木場潟研修センター設置とともにテニスコートを要望し実現しましたが、当初はむき出しの真っ黒のアスファルトでした。そこで翌年塗料の予算を計上してもらい、協会員有志がペンキだらけになってコートに色を塗ったのです。小松製作所の皆さんが大勢協力してくれました。
　翌年４面が完成しますが、これは業者が最後まで完全に整備してくれました。

（沢野）昭和６０年には市民センターにハードコート３面が完成します。

（河原）これは、小松市の北部にテニスコートが無かったので、市が設置したということです。オープニング大会では前多・山岸ペアが優勝し、河原・沢野ペアが準優勝しています。市民体育大会にも何回か使用したことがあります。

（沢野）その後、木場潟コートは人工芝に改修されますが、その理由は何かあるのですか。

（森・河原）協会として特に要望したのではなく、時代の流れというようなものです。

（沢野）そして、その後こまつドームが完成し、冬場でもテニスができるような時代になってきました。また、末広テニスコートが８面人工芝となり多くの大会が開催されるようになってきます。

（須田）納涼大会は木場潟コートで行われていましたが、徐々に末広コートが中心となるようになってきました。また、早朝テニスは木場潟で行い、その後末広で試合をするというようなこともありました。

（沢野）平成２７年には末広コートのクレー６面が人工芝となり、計１４面のＳ・フォーティーンコートとしてリニューアルオープンしました。また、木場潟コート３面に亀裂が生じて危険でしたが、デコターフの快適で美しいコートに改修されました。

（河原）小松市には各所にテニスコートが点在し、快適なテニス環境が整備されているのも特徴の一つになっています。

Ⅳ　普及活動（早朝テニス・ジュニアスクール）

（沢野）小松市テニス協会は発足当初より普及活動に対する意識が高く、多くの取り組みが行われてきました。特に発足して３年目には初心者テニススクールが開催されています。

（森）荒幡さんが企画し、精力的に動いておられました。また、金沢から横山さんが来られて教えてくださるというスクールもありました。

（河原）荒幡さんが、青少年ホームや厚生年金コートのスクール等いくつかに携わってお

られましたが、参加者も徐々に多くなり、そのうち協会員有志がスクールを担当するようになっていったという経過もあります。

（森）初代会長大田先生から、テニスの普及とジュニアの指導強化という方針が明確にされていました。荒幡さんそして歴代会長がその考え方を引き継いで今日まで至っているともいえます。

（沢野）そして、早朝テニスが１９８６年（昭和６１年）に始まって、なんと２２年間も続くわけですね。協会としてすごいエネルギーがないとこのようには続かないと思います。どのような経緯があったのでしょうか。

(河原)テニスを始めたい人が増え、それに伴ってスクールを開いて欲しいという要望が数多くあったのです。とにかく、テニスを教えてくれる場を皆が探していたという時代背景もあります。

（須田）私も主人の転勤で小松に来ましたが、テニスとの出会いはこの早朝テニスでした。今、小松で選手として活躍している人の多くがこの早朝テニスをきっかけとしています。
一面に十人以上もいて、しかも木場潟コート七面すべてを使ってスクールが開かれていました。コーチも一面に３人くらいいたと思います。

（河原）スクール生はクラス分けしていたので、コーチも多くの方にお願いしていました。６時くらいから準備して６時半から８時までスクールは行われました。１００名以上参加するという、大規模なスクールだったわけです。

（沢野）早朝テニスは、テニスとの出会い・人との出会い・選手育成の場であったということがよく分かりました。また、ジュニアのスクールもかなり早い時期から始まっています。記録によれば、１９８７年（昭和６２年）ジュニアテニススクールを火曜日と木曜日の夕方開催とあります。

（河原）保護者からの要望もあり、私と池田美知子さん大西君が中心となって数人の希望者に教えていました。会計の池田洋世さんが第一期生です。当時のプレーヤーがスクールを開設しました。

（沢野）そして、１９９２年（平成４年）に小松ジュニアテニスクラブが創設されるわけ

です。ジュニアテニスの普及と強化をめざし、今年で２５周年という歴史を刻んでいます。
　多くの方々の協力を得て、全国大会で活躍する選手や日本代表も輩出するクラブに成長してきています。また、２０１３年（平成２５年）には小松市ジュニアテニス教室が開設されています。
　普及大会としては、「わいわいオープニング大会」「納涼大会」「小松市民テニス大会」があります。

（森）納涼大会は、昔の末広コート時代に、年に一回生ビールを飲みながらテニスをして親睦を深めようという主旨で始められました。皆で鶏の唐揚げを買いに行ったり、和気あいあいとのんびりした時代でした。しかし、木場潟コートに移り、車が必要不可欠となり飲酒は禁止となったという経緯があります。

（須田）市民テニス大会は１０月１０日体育の日に行ったのが最初です。

（河原）試合になかなか出ることが出来ない人が対象でした。早朝テニスでテニスを始めた多くの方々が試合を経験する場でもありました。協会役員は運営に専念してテニスの普及に大きく貢献しました。

Ⅴ　高体連との連携

（沢野）小松市テニス協会の大きな特徴の一つとして高体連（高等学校体育連盟）との連携があります。現在行われている高校のテニス大会の多くが小松市テニス協会主催で始まったという歴史があります。小松高校テニス部の発足は昭和 34 年、大聖寺高校が昭和 52 年、小松工業と小松明峰高校が翌昭和 53 年に発足しています。そこで、加賀地区大会の創設を荒幡さんと森さんにお願いに行きました。お二人は、「よっしゃ、分かった。」と二つ返事で承諾してくださいました。そして１年生大会、これは、６０全国総体のための選手強化を目的にしていましたが、主催を快諾していただきました。

（森）１年生大会は、予想以上の反響があり、辰口丘陵公園を会場にしました。また、ドロー作成のため当時３０数万円するワープロを購入して徹夜で作業したことを思い出します。高校生の育成と強化は協会の課題の一つとして考えてきました。

（沢野）ダブルス大会、春季大会等も小松市テニス協会主催でスタートしました。現在も継続して行われ、高体連の大切な大会に成長しています。

Ⅵ　女子連の組織化

（沢野）小松市テニス協会の歴史の中で、女子連の活躍が特筆されます。全国大会でも活躍された須田さんから、女子連の取り組みについてお話願います。

（須田）県テニス協会主催大会とは別に、女子連独自に数多くの試合が開催されていました。発足当時の事情については、河原さんの奥さんが詳しいのではないかと思います。

（河原）当時は、河原・長野さん・川崎さん・池田さん・窪田さん・安嶋さん・三上さん・森さんの奥さんら十数名が中心になって定期的に練習し、試合に出場していました。そのうち、県全体として各支部を作ろうという動きが出てきたと思います。女子連として組織的に整備しようという取り組みが行われたわけです。

（森）女子連は組織化され、山形さんが初代石川県支部長に就任されましたが、石川県テニス協会には加盟されていなかったと思います。国体開催の前年、全国都市対抗の前に、私と横山さんが女子連の総会に行き、協力を要請して大会運営を手伝っていただいたという経過があります。

（須田）女子連は、国体への協力を通して県協会とのパイプができてきました。そして、全国規模の大会や行事に参加して経験を積むことで勉強して各種の資格を取得し、力を蓄えていったと思います。

（森）確かにそうです。以後、女子連の存在なくして大きな大会は運営できないという状況になってきました。

（河原）そして、女子連は県協会に加盟するわけですが、小松市の動向は県と連動しています。特に小松の女子連は大会で大活躍し、今年は全国ベスト８という躍進の一翼を担いました。

Ⅶ　強化活動

（沢野）発足当時は大田会長が国体選手として活躍し、河原氏がインカレ、小松高校がインターハイに出場しています。そして、昭和５８年に小松工業の嘉名慎二君と栗田英樹君が国体５位入賞を果たし、この時期小松工業高校が北信越大会７連覇という偉業を達成します。松下氏が壮年の部で全国大会に出場し、平成４年に小松ジュニアが発足します。ジュニアテニスクラブは民間のコーチが指導するというのが一般的でしたが、小松市テニス協会がバックアップして運営するという形は当時としては画期的なものでした。

以降、全日本ジュニア・全国選抜ジュニア・インターハイ・国体等全国で活躍する選手が多数輩出され、日本代表選手も生まれました。日本一になった選手も坂川志帆･山佐　輝･石田晃嗣の三人が誕生しています。背景には、ジュニアの育成強化という協会発足当初からの考え方があると思います。

協会としては、県体での優勝を目指した強化練習があります。また、ここ三年間は、都市対抗の石川県代表として北信越大会に出場しています。

（森）協会発足当初のジュニア教室は、受講希望者全員を受け入れるという普及に重点を置いたものでしたが、小松ジュニアは選手を育てるという明確な方針を持ち、４人の選手から始まりました。協会の皆さんに理解され、協力していただいて今日に至っています。

また、一般の大会へもジュニアや高校生が参加しやすい雰囲気があります。小松工業が強かったのは、一般の大会で揉まれていたからという要因もあります。

（河原）当時は３セットマッチで、工業の選手とはファイナルセットでやっと勝ったという思い出もあります。ジュニアを一般の大会に入れるという方針が従来よりあり、強化につながったと思います。

Ⅷ　社会貢献

（沢野）平成２３年東日本大震災という未曽有の災害に対して小松市テニス協会は５０万円の義捐金を決定しました。また、平成２８年熊本震災に際しては、テニスの日（市民テニス大会）当日に寄付を募りました。そして現在、古いボールを集めて小学校に送り、机や椅子に付けて静かな教育環境を作り出す運動を展開しています。体育協会を窓口にして教育委員会から希望する小学校に送られ、感謝の声が届いています。

（河原）東日本大震災の後、小松市テニス協会として何ができるのかということを考えま

した。平成１０年から１０年間全国ベテラン大会を開催し、日本各地から多くの方々が小松に参集されました。大会は人々の連携と協力で成立し、それらの人々の繋がりでテニスを楽しむことができます。この全国ベテランで積み立ててきた基金でお返しすることができれば、理にかなっているのではないかと提案し総会・総会で承認していただきました。単なる寄付ではなく、協会として何ができるのかという視点で取り組みました。

（森）協会として、社会的広がりを持つ取り組みを志向することは、とても大切なことと思います。

（沢野）そして平成２６年、生涯スポーツ優良団体として文部科学大臣表彰という名誉ある賞を受賞しました。小松市テニス協会が発足当時から目指していたもの、そして現在もその伝統と歴史を継承している姿勢が評価されたもので、協会員一同身を引き締める思いです。

Ⅸ　対抗戦・全国ベテラン

（沢野）１９７５年（昭和５０年）に福井市との対抗戦が始まり、今年で何と４２回目を迎えます。福井対抗戦の歴史を振り返ります。

（河原）キーパーソンは故池田貢氏です。池田氏の最初の赴任地が福井でしたが、そこには学生時代のテニス仲間が数人いて、年齢構成も選手層もレベルも丁度良い相手ということで「小松と交流、対抗戦を行おう」という話になりました。福井は、野崎さんや安間さんが中心でした。

（森）42 年間も継続していることが素晴らしい。役員の方々の継続の意志と取り組みの姿勢がその力となっていると思います。

（河原）井波との対抗戦は 31 回目となりますが、キーパーソンは窪田兄妹です。福井と同様に学生時代の仲間がいたりして、話がまとまりました。小松・福井・井波の三市町合同対抗戦も何回か行い、交流を深めました。

（沢野）1998 年（平成 10 年）から 2008 年（平成 20 年）の 10 年間、「全国オープンベテラン団体テニス大会」が小松ドームで開催されています。その経過と意義についてお話しください。
（森）1997 年（平成 9 年）に「こまつドーム」が完成し、冬期間に全国規模の大会を開催

できないかと考えました。丁度前年にスポレク祭があり、韓国選手団との交流をしようという話になりましたが、日韓の政治的問題が生じて叶わなくなりました。そこで、全日空のバックアップも得て全国ベテランを開催しようということになりました。

（河原）小松空港発着都市の協会にも呼び掛けて、多くの参加を得ることができました。2月という厳冬期でしたが、熱い戦いが展開されて充実した大会でした。
　協会員あげての一大イベントであり、この大会を経験して協会員の絆も強くなり、全国のテニス仲間との交流も深まりました。もちろん夜の懇親会も多いに盛り上がり、団体戦ならではの雰囲気があったと思います。

（沢野）50 周年記念事業の一環として約十年ぶりに開催されますが、ベテラン大会を提唱していた意義は深いものがあると実感しています。

X　協会員の推移

（沢野）発足当時は 30 名でスタートしたと記録にはあります。１０周年は２８１名、２０周年１７３名、３０周年２１２名、４０周年１８３名と推移してきました。
　協会員の構成は、一般の競技に参加する人が中心でした。しかし、残念ながら競技人口は減少傾向にあります。そこで、数年前シニア連盟と協議をして協会に加入して頂きました。同時にジュニアも加入して「４歳から８０歳代までのテニスライフ」をキャッチフレーズにしました。昨年度の協会員数は３００名を越えました。

（河原）危機感を持ったのは、テニスを始めた人が自分たちでグループを作って楽しむことが出来るようになり、別に協会に入らなくても楽しくやりましょうという意識が強くなってきた時です。協会に入るメリットがないという声までも聞こえてきました。

（森）テニスコートがあちこちに出来て、手軽に楽しむことが出来る環境も整ってきたという背景もあります。

（沢野）　協会員は参加料無料の大会もあります。皆さんの意見をお聞きして、それぞれの大会の意義を明確にし、メリハリのある協会のあり方を考えていく必要があると思います。

XI　課題と１００年に向けて

（沢野）小松市テニス協会は発足した当初から、「普及と強化」を大きな二本の柱として歴史を刻んで来ました。そして、「生涯スポーツ優良団体」として文部科学大臣表彰を受賞するという栄誉を得ました。最後に、皆さんからの小松市テニス協会の課題と 100 年に向けた展望を語っていただこうと思います。

（森）小松市テニス協会の精神と原点に立ち戻る姿勢が常に求められていると思います。協会設立の恩人である大田氏と荒幡氏の功績、そして５０年の歴史を振り返ることが大切です。ジュニアの交流と強化を目的に、渋谷さんが寄付をして下さいました。これらの方々の献身と協力を礎として成り立っていることを忘れないでほしいと思います。
テニスはイギリス発祥のスポーツですから封建性も強く、マナーや先輩後輩のけじめ、服装や礼儀も重んじています。これらの精神を忘れなければ、100 年経っても大丈夫です。

（河原）テニスというスポーツは、ラケットを握ってコートに立てばボールを追うことに夢中になり、その魅力で多くの人々が集まってきます。しかし、コートに入った時は相手を敬うという基本的な精神を忘れてはならないとおもいます。
一方で、時代は流れているのも事実です。協会としては現代のニーズは何なのかを絶えずキャッチする必要もあると思います。

（須田）テニスは世界中どこに行っても楽しむことが出来るスポーツです。私自身、主人の転勤で小松に来ましたが、テニスという魅力あるスポーツに携わることが出来て幸せです。小松市テニス協会は 100 年に向かって歩み始めています。この時代にテニスができるここに感謝しています。

（沢野）小松市テニス協会は 50 周年という大きな節目の年を迎えました。発足当初の原点に立ち戻り、新たな気持ちで 100 年に向けて進んで参ります。ありがとうございました。